彰如上人

〝句仏〟の号

勿体なや　祖師は紙衣の　九十年

句佛

四月一日から六日まで〈彰如上人五十回忌法要〉、四日から五日まで〈綽如上人六百回忌法要〉が、それぞれつとまります。

〈彰如上人〉は、一八七五（明治八）年二月二十七日、東本願寺第二十二世現如上人の第二子としてお生まれになり、九歳で得度。本名を大谷光演。声明、書画、謡曲等に非凡の才を示されました。なかでも俳諧に秀で、俳号を「句仏」とされたところから句仏上人とも呼ばれました。

幼少のころから俳句に親しんでおられた上人は、二十歳を過ぎたころから本格的に取り組まれるようになりました。特に正岡子規の唱導する新俳句論に共鳴し、高浜虚子や河東碧梧桐らと親交を結び、創刊まもなく発行が困難になった俳句誌『懸葵』を継承し、主宰となるなどその関わり方は本格的なものでした。

一九三五（昭和十）年、上人還暦の際に『夢の跡』、つづいて一九三八年には『我は我』と題する句集を上梓。その作風は、上人の代表句、

勿体なや
祖師は紙衣の九十年

からもうかがえるように、信仰が土台となるものが多く、俳号「句仏」は『浄土論註』の「句をもって仏徳を讃嘆する」によったと伝えられています。

一方、上人が一九〇八（明治四十一）年、三十三歳で東本願寺第二十三世を継承されたのを機に、御影堂門をはじめ、黒書院、白書院等を増築され、現在の東本願寺の伽藍がほぼ完成しました。また上人は、当時困窮を極めていた宗門財政の変革に取り組もうとされ、北海道、島根県で炭坑および農場経営を、さらには中国大陸での綿花畑の経営に乗り出されました。

しかし、この計画も、思うような収益をあげることができず、一九二五（大正十四）年、長男の光暢氏（現門首）にその職を譲り、引退。一九四三（昭和十八）年二月六日、六十七歳で逝去され、今年が五十回忌にあたります。